

がんの要因、感染がトップに

がん社会 を診る

中川 恵一

がん原因の約18%、女性の約15%を占め、男女合わせると、がん原因のトップ（17%）です。

喫煙は男性の発がん原因のトップの約24%を占めますが、女性では4%程度にとどまります。男女計では、がん

の原因の2位（15%）がたばこです。これまで長い間、日本人のがんの原因のトップはたばこでした。しかし2002年度の国民生活基礎調査によると、男性の喫煙率は約25

%、女性では8%まで低下しています。

1965年時点の喫煙率は男性82%、女性16%程度でしたから、喫煙率の劇的な低下とともに、がんを誘発する感染症が発がん要因の第1位となっただけです。

感染、喫煙に次いで重要なのが飲酒で、発がん原因の6%（男性約8%、女性約4%）を占めます。感染、喫煙、飲酒が三大発がん要因で、塩分過多や運動不足、大気汚染、肥満、野菜不足など、その他の要因はわずかなウェイトにとどまります。

原因ウイルスが母乳によって感染する「成人T細胞白血病」も感染型のがんの一つです。

感染が発がん原因のトップであることは日本に限らず、中国、韓国、ベトナムといったアジア諸国に共通します。中国では発がん原因の2割、ベトナムでは3割近くを感染が占めています。一方、欧米各国では感染型のがんは5%程度にすぎません。

多くのがんが診断されるまでには20年、30年といった年月を要しますから、がんは過去の「社会を映す鏡」のような存在です。

日本社会はまだまだ、衛生環境が整っていないかった過去の姿から影響を受けているといえるでしょう。これは20年まで結核の「まん延国」だったことでも分かります。

日本を含め、近代化が遅れたアジア諸国で、感染型のがんがまだまだ多いのは当然だといえるでしょう。

（東京大学特任教授）

「医食同源」という言葉があります。食事でがんを予防するのは容易ではありません。例えば野菜不足が原因とされるがんの割合は0・2%にすぎません。

確かにがんは様々な原因によって発生しており、その中には予防できるものも多いのは事実です。

日本人男性のがんの43%、女性のがんの25%、男女合わせると36%が生活習慣や感染が原因だと考えられています。なかでも感染は男性の発

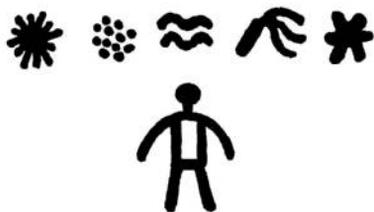


イラスト 中村 久美